

CONTENTS

UNICEF 最前線

今そこにある悲惨と危機 第3回

2-3

取り残される人びとの存在に光を
——互いを理解し合い、認め合う共生社会目指す

明日へ「わたしもボランティア」

心のレンズに見えた

4-5

「戦争だけはしたらあかん」
堀越善孝さん



誰一人取り残さない

ユニセフの教育支援プログラムでダンスを披露する若者。彼には左脚がない。障害児への偏見が根強いなか、ダンスの楽しさを知った若者は飛び切りの笑顔を見せた。2019年6月、モーリタニア東部の難民キャンプ（岡本啓史さん提供）

取り残される人びとの存在に光を ——互いに理解し合い、認め合う共生社会目指す

世界の難民は現在約1億2000万人を数え、難民キャンプには国際機関などから多くの援助が行われている。だが、アフリカ西部のモーリタニアに派遣された元ユニセフ職員、岡本啓史さん（神戸市）はある「矛盾」に気付いたという。以下の2点を問題提起した。（河合洋成）

ホストコミュニティとの共存

ホストコミュニティとは、難民を受け入れている国や地域社会を指す。岡本さんは2018年5月から約1年半、教育支援の担当者としてモーリタニアに駐在。同国東部にある難民キャンプをしばしば訪れた。キャンプには当時、隣国マリの内紛から逃れてきた難民約6万人が暮らしていた。

そこで目の当たりにしたのが、支援から取り残されたホストコミュニティの存在だった。

難民キャンプには国際機関やNGOなどからの支援で住居や学校、医療施設などが設置され、飲料水や食料、衣類の提供、スタッフの常駐など生活に必要な基本的援助は整備されている。一方、キャンプ周辺のホストコミュニティとなった町のインフラは脆弱。学校はなく、子どもは学ぶ機会がない。病気になったら行く先は難民キャンプの病院……という格差に不満を募らせる住人は少なくなかった。

こうしたギャップは、世界各地で「摩擦」を生じさせている。



首都ヌアクショットでユニセフの支援プログラムに参加した子どもたちと手を振る岡本さん（最後列中央）、スタッフら。 2019年3月（岡本さん提供）

ロシアによる侵攻で始まったウクライナ危機では、国内避難民を多数受け入れた同国西部のホストコミュニティの困窮が伝えられている。住民は高齢者や女性、子どもがほとんどで、情報も少ないため、支援の手が届かない状況にあり、追い込まれているという。

また、ミャンマーからのロヒンギャ難民が流入するバングラデシュでは、地域の負担が増したことで両者の対立が生じ、政府が仲介策に乗り出した。国際的な支援組織のなかで両者の相互理解は大きな課題になっている。

ユニセフも昨年、日本政府と協力し、紛争が続くスーダンからの難民が絶えないチャド東部のホストコミュニティへの支援を報告している。飲料水や衛生、栄養面などの基本的生活のケアのため、現地住民が利用しやすいよう改善策を施し、生後まもない子どもの健康維持のため母親たちに講習会を行ったり、せっけんや消毒水が入った衛生キットを2,000個以上配ったりした。これにより、栄養不良で危ぶまれた女兒が回復する事例も。約4万人が暮らす難民キャンプとの緊張が高まらないよう、ホストコミュニティとの結束を強める持続的な取り組みにも腐心しているという。

もちろん日本政府もこれだけではなく、アフリカをはじめとした各地でホストコミュニティの人びとの自立も視野に入れたプロジェクトを展開している。見えにくいホストコミュニティの存在にも目を向ける、これも大切な人道支援として忘れてはならない。

障害児の居場所をつくる

もう一つ、岡本さんが指摘した問題は、現地社会の障害児（者）への偏見だった。

出会ったのは左足を失った若者。ダンスに参加することで彼は社会との接点を見つけ、周囲から拍手をもらうことで自立を目指すようになったという。住民には障害

児は「表に出てはいけない」「タブーの存在」との意識が根づいていることが背景にあった。

ユニセフが2021年11月にまとめた調査報告書によると、世界で障害がある子どもは推定約2億4000万人。「教育へのアクセスから家庭での読み聞かせに至るまで、ただただ取り残されている」とし、障害児の社会参加の難しさを強調している。

「障害者の権利に関する条約」（2006年、国連総会で採択）では、あらゆる障害者の尊厳と権利を守ることをうたい、「われわれのことを、われわれ抜きで勝手に決めるな」とアピールしている。

しかし、理想とは裏腹に現実には厳しい。

同報告書では、障害のない子どもと比較して、次のような数字が並ぶ（抜粋）。

- ・基本的な読解力や計算力を身に着けることができる

可能性は42%低い

- ・発育障害になる可能性は34%高い
- ・学校に全く通えない可能性は49%高い
- ・不幸だと感じる可能性は51%高い
- ・差別を感じる可能性は41%高い
- ・厳しい体罰を受ける可能性は32%高い

このため、求められているのが障害の有無に関係なく、すべての子どもがともに学ぶ「インクルーシブ教育」。障害があってもなくても、子どものときからお互いを理解し合い、認め合う共生社会を目指すのが目的だ。

「社会から排除されてきた障害児への偏見は今、決してあってはならないこと」とし、ユニセフは各国政府やNGOに対して「公平で質の高い教育」の実現を達成するための協力を、強く働きかけている。

コラム

灼熱の砂漠の国で教育支援

元ユニセフ教育専門官 **岡本 啓史さん**



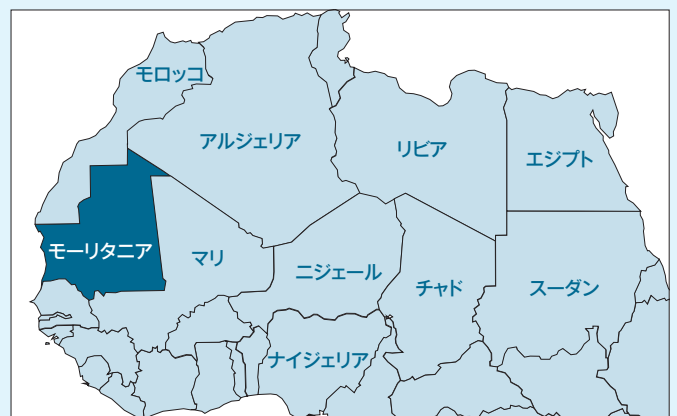
モーリタニアの首都ヌアクショット近郊の空港に降りたときの気温は40度超の「灼熱地獄」。別の国際機関職員として過ごした前任地のモンゴルは極寒の地で、約80℃の気温差に歓迎されて驚いた記憶が強い。

現地では教育プログラムの調整役を任された。同国だけではなく、マリ難民の子どもたちもケアする。首都から遠く離れた東部国境の難民キャンプは、設置されてから10年以上経っており、気付いたのがホストコミュニティとの「摩擦」だった。

「ぼくらは（援助物資を運ぶ）車の砂煙しかもらっていないよ」。そんな言葉を聞いた。さらに、地元には病院がないため、病人はロバの背に乗せて難民キャンプの医療施設まで運ばなければならないと知り、衝撃的だった。世界の関心は難民に注がれがちだが、不公平感がないよう対策を考える姿勢が必要だろう。

また、両者の交流を図ることも大切。そのためのワークショップで、左脚がない若者に会った。伝統社会には目に見えない偏見やタブーがある。そこで考えたのが、若者の潜在能力を引き出すための「自己表現」プログラム。若者はダンスのワークショップにやってきて、思い切り手足を動かした。初めて人前で踊って覚えた「解放感」。周囲から拍手喝采も受け、若者の顔には飛び切り

の笑顔が浮かんだ。今まで差別され、将来の希望をなくしていたうっぶんを吹き飛ばしていた（表紙写真参照）。それはユニセフが進める「無限の可能性を秘めた世代」のための試みを実感できた思いだった。（岡本さんは帰国後、神戸市内に「グローバル学び舎3L-ミエル」を開設し、異文化交流活動に取り組んでいる。）



【地域解説】モーリタニア

アフリカ北西部に位置し、ほとんどがサハラ砂漠地帯。1960年、仏領から独立し、人口約460万人。イスラーム教が国教。世界最貧国の一つとされるなか、日本の技術支援でタコ漁など大西洋での水産業が盛んになり、大きな収入源に。日本に輸入されるタコは同国産が全体の約3分の1を占めて一番多く、大阪名物「タコ焼き」を支えている。